

「台湾・台北市視察旅行」 リピーターの記憶の断片から

岡田和秀

このたび経営研究所主催の台湾訪問団に加わった。加藤茂夫経営研究所長を団長に、総勢8名の小さな訪問団であったが、団員の構成も文字どおり老・荘・青いずれも気鋭の人々で、充実した3泊4日の視察旅行であった。産業、行政、教育機関、そして文化施設まで多岐多様な訪問は、台湾の現況の一端について、多くの情報を団員に提供してくれたとともに、各所でのホスピタリティあふれる受け入れは、印象深いものであった。

団長の下、幹事として、プログラムの作成から現地での庶務全般を取り仕切った李建平所員のご尽力に、団員の一人としてここに記して感謝する。

*

このたびの訪問団の盛り沢山の行事の内、本来の視察についてはほかの団員の報告に任せて措くが、私が報告すべきと思うのは3月13日夕刻からの専修大学台湾校友会会合への参加である。目まぐるしいほどタイトなスケジュールの中で、校友会の皆さんからいただいた暖かい歓迎は、ほっとした心持ちを味わうことのできた忘れがたい思い出の一コマになった。

戦前の専修大学に学んだ最高齢の人たちを含め、「今おいくつですか」と思わず尋ねてしまった大先輩たちから、つい10数年前の卒業生で、偶々経営学部に学び今台湾のビジネス界の一線で活躍している人たちの中に、キャンパスで見覚えのある顔が髭髯としてくる人たちまでの同窓会の席に連なって、専修大学と台湾、日本と台湾との関係に思いが至り特別の感情にひたされた。

大学のいわゆる国際化のなか、今と比べものにならない数の留学生在が在学していた往時、どの国から会長を出すかで、各国留学生の間で激しいポリティッ

クスがあったといわれる頃に、専修大学留学生会会長を務めたHさん、殆ど同期だったUさん、団員中最長老儀我先生の大学院での教え子で、のち英国で学位を取得したT博士、などなど、専修マンとの異国台湾・台北での再会は、改めて私に懐旧の情を抱かせた。

ここ年来音信を交わしているのは、専修大学在学中に2度3度言葉を交わしただけの儀我先生の教え子Tさんだけであった。修士学位取得後、日本を離れてからも毎年、英国留学中も一度として途切れることなくクリスマスにあわせて送られてくるカードに、年始を賀す文化を持つ日本人として、またクリスマスでもないと、私はいつも日本式に元旦に賀状の返礼を書いてきた。T博士の律儀さに応えて、ただ返礼をしてきただけだった。

その研究者としてすでに一家を成している人が、いま年経て台北を尋ねた老師儀我先生に接する傍目にも麗しい態度をいま私は目の当たりにしている。これが中国伝統の師に対する尊敬の表し方なのだと、一人合点をして、胸が温まる思いであった。旅先での、専修大学を仲立ちにした人と人の邂逅のシーンは、私に懐旧の思いを高めてくれた。高揚した気分の中あらためて、私は訪台北の記憶を辿りはじめていた。

*

私にとり今回の台湾訪問は数えてみると6回目である。と言うより、台北以外の台湾の都市訪問は、一度台北のついでに高雄市に滞在、そして嘉義市近くまで足を伸ばしたことがあっただけである。その意味では、今回は6度目の台北訪問記と書いたほうが良いだろう。台北訪問にまつわる記憶の中からエピソードをいくつか拾い集めてみよう。

第1回の訪台北は、1969年3月27～29日の2泊3日の滞在だった。もう40年も昔の出来事である。学生6名と小生を含む引率教員3名による東南アジア4週間の視察旅行の一環であった。1ドル360円、持ち出し可能な外貨＝米ドルが500ドルの時代で、海外渡航の自由化（1964年4月1日）が始まって5年しか経っていないころの訪台北であった。

時効だから記すが、4週間の旅行中の万が一の場合に備えて、米ドル調達日

的の最初の寄航地が香港であった。九龍の街頭で私に与えられたそのミッションを達成するまでの困惑にもかかわらず、あっという間に両替が出来る自由貿易港の実状に驚いた。今日海外どこの都市でも見られる両替屋の存在は、往時の私にとって想定外だったのである。その後タイ、インドネシア、マレーシア、当時のロイヤル・カンボジアを経て、再度香港、そして最後の目的地が中華民国台湾・台北市であった。

記憶茫茫といえ言えるが、初めての外国訪問とあって緊張していたせいで、また当時台湾の外国人ツーリストの受け入れが、その他の国に比較してもいろいろの意味で極めて限定的であり、それまでたどってきた各国各地の対応と比べても、入国時からサプライズの連続、アクシデントの連続であったので、いくつかのエピソードをよく覚えている。

まず、入国に際して、滞在中に必要なもの以外、費消予定外の貨幣まですべて保税倉庫留置 (Bond) を命ぜられた。いざ離台の際、私と幾人かの学生がノースウェスト便で先行することでパスポート・コントロールを通過したとき、保税倉庫留置されている荷持の引き換え証は、私が所持している一通に一括されていることが判明した。あわててイミグレーション・オフィサーと延々と掛け合い、ようやく別グループに連絡をとった。その結果、自分たちの搭乗時間に間があると寛いでいた帰国途上沖縄 (当時米軍による占領中) へ立ち寄る別グループの査証が期限を過ぎ無効になっていることが偶然わかり、全員がわれわれ先発予定の日本直行組に合流することでまたまた大騒動となった。保税倉庫留置された荷物の確認は徹底しており、特に所持金の検査は滞在中に費消した金銭の領収書と持ち込んだ貨幣と突合せをする。最後に、ボディ・タッチでポケットの中まで探られるという徹底したもので、忘れがたい経験することとなったのである。

日本人といえども査証なしでは入国できないという復帰前の沖縄の置かれていた地位に改めて気づかされるとともに、当時の台湾を含む東南アジアに位置する新興国への私自身の関心の始まりとなった。

第2回目は、1973年3月。公式には、大阪青年会議所の派遣したミッションの一員としてフィリピン・ケソン市で開催されたJCアジア・コンヴェンションへの出席途上の訪台北である。

前年1972年9月の日中国交正常化に伴う台湾の日本との外交断絶宣言をうけて、政経不可分の原則下、関係が切られる日台間の経済関係維持の方途を議論するために、商都大阪の青年経営者が台北青年会議所との懇談も持つ目的の訪問であった。日本青年会議所次期会頭が大阪青年会議所から出るようになっていたので、このミッションは先駆のような役割を担っていたのである。そのとき私は、大阪青年会議所国際委員会のアドバイザーの資格で同道していた。

旅装を解き、われわれだけの夕食後、指定された会場の台湾青年会議所に向かう。儀礼的挨拶を交わした後、早速始められた議論は激しく、終了した時は日付が変わっていた。ホテルへ戻ると、道中の疲れもあって私はベッドへすぐ入った。

翌日、昼餐の席で何もなかった風情で、「乾杯」「カンペイ」と乾した杯の底を見せ合う中国流で、台湾サイドの出席者と杯を重ねる若手経営者のタフさ加減に私は驚かされた。その後の日程でも、コンヴェンションの席でも、また団員の昼となく夜となく間断なく続く諸々の行事をこなす若き企業経営者たちのタフさ加減に私は驚かされた。

飛行場への往復の車窓から眺めただけの台北ではあったが、先の滞在のときから4カ年の間に確かに発展していた。目の前にいわゆるアジア的な町並みが整い、それが広がっていているのが伺われた。街を歩く人々の歩みも活発さを増している、と印象付けられた。

*

1987年5月17～20日、汎太平洋地域の広範な問題に関心のある社会科学研究者をはじめ、各界各層の参加者を集める国際学会Pan Pacific Conference IVへの参加が、私の第3回目の台北訪問の機会となった。台湾の迎賓館と言われる圓山大飯店(The Grand Hotel)が会場であった。かつて台湾神社の敷地跡で

あったというこのホテルの玄関へ向かう坂道は、途中で上りと下り専用で二股に分かれる。その分岐点のところに、衛視が立っている。そして其の制服は、戦後東京のいたるところでカーキ色のジープと一緒に出くわした進駐軍のMP（憲兵）のそれにそっくりで、銃剣を着けた銃に、私は国民学校・小学生時代の記憶をよみがえらせ恐怖感に似た感情を持ち一瞬たじろいだ。滞在中、なぜか其の気持ちを払いのけることができなかった。

衛視の存在は、台湾のおかれた国際的環境とその中で台湾の人々の緊張感の表れなのだったと思った。日本との間に公式の外交関係がなくなって15年になり、台湾は亜東協会（現駐日台北経済文化代表処はその駐日事務所）、日本は交流協会がそれぞれ民間の立場で、いわゆる外交・領事業務をこなしている。私のこの時のビサは、亜東関係協会東京弁事処で発行されていた。

この国際会議は、私の今までの国際会議出席の限られた経験の中でも異色であった。このP.P.C.は、いつも開催国の関係機関を挙げての組織化が特徴である。当時のR.O.C.（中華民国）政府の機関が多く主催、共催団体として名を連ねており、時の李登輝副総統が開会式でスピーチをしたことは記憶に残る出来事であった。台湾政府の国際資本導入への多大の関心が率直に表明され、会場にいる台湾関係者に対しても企業活動活性化の檄を飛ばすという趣のスピーチであったと記憶している。手元にある会議のスケジュール表の最初の1ページには、当時のロナルド・レーガン・アメリカ合衆国大統領からの挨拶状のコピーが載っている。

偶々出席したComparative Business Ethicsと題するセッションは、私にとって衝撃的であったし、後日歴史というものを学ばせてくれるものとなった。韓国からの報告者が、自らが役員をつとめている韓国のいわゆる財閥の同族支配からの離脱について語ったのである。私はその場で、産業の民主化の進展で、会社支配の公開化は必然と肯いていた。

帰国後秋、韓国の労働運動に変化が起こったのである。それまで、韓国政府はプロ・マネジメントで、労働側に厳しく当たっていたが、その姿勢が変わったのである。社会の民主化の進展が、産業・企業支配の民主化を促していたの

である。私は、財界と政府との間のある種の合意がすでに成立していたのだろう、と臆断した。5月の台北のP.P.Cでのさる財閥役員の発言も、そうした動向についてのひとつの先触れとして位置づけられていたのだろう、と憶測を巡らし得心したのである。

コンファレンスでは自らも共同執筆者を代表して論文発表をおこなったが、この機会を利用して、大学院時代の台湾からの留学生Cさんに会った。帰台し大学の教壇に立っていたCさんから一夕、李副総統が好んで訪ねるといふ街中の小体な料理屋へ招かれた。久々の邂逅でいつしか思い出話になり、Cさんは日本での学位取得のあと官途に就いたときの話をしだした。

台湾に当時残っていた「買官」という弊風の話になり、Cさんは大きくため息をついた。私はただうなづいて聞くばかりだった。話が途切れるまもなく、Cさんは、学生時代の友人が待っているからと、その料理屋から遠からぬ喫茶室へと私を誘った。そこで出会った人物は、Cさんが台湾の国立工科大学の学生時代からの親しい友人で、往時反政府的な活動を行い拘束され、大陸にもっとも近いK島、B島に送られた経験を共有する友人であった。

その友人もまた一度は官途に就いたが、今はまとまった自己資金を運用して暮らしている、ある種の利子生活者だと語った。官途を捨てた理由については何も語らなかった。Cさんもそのときまでに官途を捨て、すでに私立大学の教壇に立っていた。Cさんもまた、理由は語らなかった。私は、日本にないが世界による普遍的なキャリア・デヴェロップメントのモデルなんだ、と理解した。

時あたかも、台湾が当時のNICS内の外貨獲得競争のチャンピオンであったので、われわれの間で台湾政府の外貨政策が話題になった。ある種の利子生活者と名乗った人物は、雄弁に語り、当時の日本政府による資本の海外移転についての抑制的姿勢を批判した。台湾の人たちが、ときにアンダーグラウンドの銀行モドキを使って財産の海外移転を図っている実態と、その正当性を雄弁に語った。

私もCさんが滞日中、C家の財産の海外移転のために都内の不動産を買っ

ていたことは承知していた。C家の兄弟姉妹は、それぞれ別々の国の大学に留学していた。弟さんは英国へ、妹さんは米国へ留学していた。Cさん自身、学生時代の反政府活動の前科が災いしてアメリカ留学ができないので、日本に来たと話したことがあった。

後年、結果的には私が顔をあわせる最後となった日本訪問の折、Cさんは娘が米国留学をしつこく希望するので、娘と母親つまりCさんの妻のふたりを米国に移住させると語った。ただし、自分は愛国者だから息子は台湾・台中市のT大学へ進学させて、自分と台湾に暮らしつつけると言った。その後しばらくして、Cさんからの恒例の年始のカードが届かなくなった。台北のCさんの自宅の電話を鳴らしても、中国語を話す人しか出ないし要領を得ない。音信はぷつぷつりと絶えたままである。

*

第4回の訪台北は、2001年6月14～20日までである。後半の日程は、ICSB (International Congress of Small Business) の台北会議への出席を主目的としていた。前半は、その先年オーストラリア・ブリスベン市で開かれたICSBの会議場で面識を得た台湾中部嘉義市在の金属加工業経営者の招待に応えたものであった。高雄まで空路を飛び、嘉義市近くの工場へは陸路自動車で往復した。道中初めてとっていい台湾の農村地帯の風景は、どこか日本の昔の風景にも似て懐かしさがあつたし、工場の立地する工業団地の風景も同様であった。

台北市役所の入り口を入ったところのホールを会場とする馬英九台北市長主催のレセプションを皮切りに、ICSBのコンヴェンションが始まった。宿泊先のホテルと会場であった市庁舎に隣接する出来たてのコンヴェンション・センターの間は15分ほどの道のりで、私は会期中原則徒歩を貫いたので、台北市庁舎近辺の街区に詳しくなることができた。今日はこの道と、行き帰りのその日の気分に合わせて街中を歩いた。87年以来15年足らずで、台北は大都会になり、中高層のビルであふれている事を実感した。このとき私には旧知の尋ねるべき友人Cさんもなく、一介のツリストとして、東京とあまり代わり映

えのない街角を歩きまわっていた。

*

第5回目の訪台北は2004年12月14日～16日のことであった。当時の(社)科学技術国際交流センター(のち独立法人化された)主催の第10回アジア・太平洋科学技術マネジメント・セミナーへ企画運営委員として、また会議でのセッション・チェアとしての出席であった。このセミナーには、遡って第7回以来、企画運営委員として、また全体会議チェアあるいはセッション・チェアとして連続参加していたが、アジア・太平洋地区の国が持ち回りでホスト・カントリーをつとめる運営方法で、この年台北が選ばれていた。

会議場は、1987年と同じ圓山大飯店であった。高台にある当ホテルからは、台北の街が見渡せるが、北投地区から臨海リゾートとしてにぎわうという淡水へ向かう高速鉄道(市中心部は地下鉄、圓山から見えるあたりは高架鉄道)の高架も見える。ガイドブックの台北敏捷運路線図を見ると、高速鉄道が四通八通しているのがわかり、台北の都市としての広がりが高くわかる。高速道路の整備も先年の経験からすれば、すっかり行き届いているように思える。私の初の訪台北1969年からざっと40年、間違いなく発展している。圓山大飯店の往時のMPそっくりの衛視も最早いない。特定国との間にしか外交関係を持たないが、国際環境の変化で、その必要性がなくなったのであろうか。

このセミナーは、台湾政府の科学技術政策研究・情報センターの要職にある人がホストを勤めたが、この仕事を限りに転職するという話に、日本的でない雇用慣行のモデルを見るようであった。私を含め日本人参加者だけが「そうですか?」と半ば驚き半ば怪訝な面持ちであった。他の国からの参加者は、日本人の反応にむしろ驚いているといった風であった。台湾流、否ワールドクラスのキャリア・デヴェロップメントのモデルなのであろう。日本でも、終身雇用モデルは崩壊しているが、特定職種における「労働者の長期的コミットメント」(R. Dore)の有効性の認識が、時に短絡的に日本的システムへの回帰願望につながっていることに、私は思いを巡らしていた。

このときの訪台北は、私にとって台湾からの留学生たちとの再会をめぐる思

いがけない出来事で特別のものとなった。その先年、台北市北投に住むその頃出講していた他大学の大学院で教えたWさんからの賀状に自宅の改装も終わったので、一度訪台北をとの誘いのメッセージをもらっていた。e-mailで国際セミナーでの訪台北を伝え、一夕会う機会を得たいと申し出て、会議の前々日に台北入りをすることとした。

Wさんが空港へ出迎えてくれ、夕食までの数時間を市内巡りをしたのち市内のレストランへ行くと、先客がいてWさんと大学院の同期生で、私の専修大学大学院の教え子Sさんの弟と名乗る。さらに、姉のSさんと同道生田のキャンパスを訪ねたことがあるという。私と面識があったのである。夕食後、Wさんは、葬儀のために明るく日の私のアテンドが出来ない、については後事をSさん姉弟に託してあると告げた。私の教え子のSさんは明日の午前高雄から飛行機で台北へ来るといふ。

Wさんの車で、ホテルに送ってもらい、Sさんとロビーのバーで少時語る。高雄出身のSさんは、台北での学部教育を終えると私が出講していた都内の大学院に留学、商学修士の学位取得後台北でビジネスを始めた。が、間もなく年内にも台北を去り出身地高雄へ帰るといふ。

翌朝、午前中の早い時刻に現れたSさんと、Sさんの姉上、すなわち私の古い学生を待つ。3人がそろったところで、観光の計画を立てる。考えてみると今までの訪台北で、観光らしいことは殆どやっていないことに気づき、S姉弟の勧めで、海浜リゾートの淡水、そして故宮博物館を訪ねることとする。故宮博物館のレストランでの昼食、旧台湾鉄道会社の役宅をレストアした茶館のお茶、台湾大学（旧台北帝国大学）側の大学の教職員、学生で賑わういわゆる食堂での夕食と、一日中テーブルを挟みただただ話していた。

姉Sさんの学位取得後の生活；日本留学で医家となっていた人と結婚、その後夫の医局勤めのため日本滞在を続け、その間にもうけた二人の子供の出産のたびに米国に短期滞在をして、彼らに米国籍をとらせたこと、などなどをSさんは語った。そして突然、「最近自分で運転をするため、運転免許証をとった」といふ。その理由は、小学校に通う二人の子供の送り迎えのためといふ。

今までタクシーを雇っていたが、タクシー運転手による誘拐事件が多発するので安全のために敢えて自分で運転を始めたという。

そういえば、空港まで出迎えてもらったおり、Wさんが「家のこの運転手はもう長く勤めているので信頼できるから、安心を」と、言ったのを思い出した。Sさん姉弟にきけば、高雄、台北でも自家用車のショウファーによる営利誘拐事件は頻発しており、私にもタクシーの利用に際しては滞在中はホテルのタクシーの利用を優先するようという。

台湾の治安についての心配は、社会の各層で違うであろうが、それへの対応はさまざまな形で現れている。姉Sさんの米国での出産のケースも、それにつながる。Wさんについても聞けば、台北のインターナショナル・スクールで初等・中等教育を受けて、米国で学士を、そして日本で大学院を修了している。しかも国籍は外国籍である。中国大陸での仕事も手広くやっているその父上もまた、外国で学位を得たエンジニアで、国籍は外国籍であるという。

タクシー、そして自家用車のショウファーの手引きによる誘拐事件は、Sさん姉弟の出身地高雄でも、台北でも、台湾中の大都市で頻発しているという。話を聞くほどに、すっかり中進国として、さらに先進国の仲間入りの地位を確実にしている台湾の、そしてその象徴的な台北、さらに工業化政策の戦略的地位を担い続けてきた高雄の、内に抱える闇の深さを垣間見せられる気がしてきた。そしてそこに暮らすことのストレスの大きさに暗澹たる思いが湧くのを覚えた。Sさんの高雄への帰郷理由も、台北ぐらしのストレスがあるのかも知れないと考えた。

*

2006年3月12～15日。第6回目の訪台北。2004年12月以来、14ヶ月の間を置いた台北訪問は、冒頭に記したように経営研究所派遣ミッションでの行動で、上記のようなエピソードの類はなかった。専修大学台湾同窓会会合への出席の機会を得て、むしろ懐旧の情を掻き立てられ、その思いに浸るとともに、過去の台北訪問のすべてを思い返す縁となった。

先年の訪台北の折には、未完成で2階までのショッピング・アーケードだけ

が先行オープンしていた評判の100階建てビルディングも、今回は全館オープンしていた。最上階の展望室から眼下に見る台北の街の眺めは、期待ほどでなかった。いささか高所恐怖症気味であることを発見し、そもそも眺望を楽しむ余裕がなかったのである。

2004年訪ねたとき、既に始まっていた故宮博物館の改修工事はそれほど進んでいるとも見えなかったが、新築の部分は従来の建物と違って‘本建築’であった。往時、中国本土での戦火を避けるべく北京紫禁城から南京政府により運び出され、最終的に台湾にもたらされた館蔵品の精品中の精品が今台北に在る。私たちは館蔵品のわずかな一部を展示品として見たに過ぎない。私も過去2度訪ねたことのある北京在の同名の本来の故宮博物館の展示品に比して、それは中国文化の華そのものである。

そして、本格的構築物を整備拡充していることは、館蔵品が1965年に創設されたこの地に、これからも永くとどまることを象徴するのか、この地が置かれた国際的な位置について、簡単にまた短時日のうちに解けそうもない問題の存在にしばし思いをはせた。

*

10月10日は、1911年清朝を倒した辛亥革命の引き金を引いたといわれる武昌蜂起を記念して、毎年台湾で賑々しく開催されるという双十節である。ニュースは、陳水扁総統退陣を求める市民運動の高まりの中で行われた今年の双十節は、式典会場の賓客のいる前で与野党議員がもみ合うなどの混乱があったと伝えている。史上初の民選総統を誕生させてから丁度10年を迎えようとしている台湾は、市民運動に対する政府の対応次第で、その民主化の定着が国際的に問われてることになるだろう。

誕生の機会を逃さず次世代に外国籍を得させ、外国に資産を移転し、一旦事あらば国を捨てる覚悟と見られてもしょうがない人が少なからずいる台湾の現状をどう考えたらよいのだろうか。現実感覚鋭い華僑で有名な民族固有の知恵と割り切るのは、一方、友人たちを庇ってやりたい気持ちと交錯して、私にはいささか憚られる。

10月9日北朝鮮が「地下核実験を実行した」と発表。にわかに激動を始めた日本を含む極東アジアを見ると、日本人が、台湾人に比して国家存亡の危機とも解釈できる昨今の国際状況に対してたいしては、あまりに無自覚でないか、あまりにナイーブないかと、時に慨嘆するにも私にも拘わらず、若干の違和感を否めないのである。

(平成18年10月12日)